

一、善功摂化

先ず、御本典証卷十五右か、論註下二十七右か、聖典（明治書院島地編）一二ノ一二九を開くべし。

「善功摂化とは、（論に）『是の如きの菩薩は、奢摩他毘婆舍那、広略修行して、柔軟心を成就す』とのたまえり」

以下講ずる所は、もと論註下に出づる善功摂化章の文である。聖人はこれを証卷の還相篇に引用せられた。即ち、浄土に往相して自利成就する菩薩は、浄土に生じおわつて、やがて利他教化地に到つて大慈悲をおこし、一切衆生を還相摂化するのである。されば、この証卷、還相回向篇の最初には、「浄土論に曰く、『出第五門』とは、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察し、応化の身を示して生死の藪、煩惱の林の中に廻入し、神通に遊戯して教化地に至る、本願力の回向を以ての故に、是を『出第五門』と名く」と出された。

如来本願力の回向によつて、浄土の菩薩は、弥陀同体の証を成就して後、生死煩惱の藪に廻入して、遊戯三昧に生きる。これより講ぜんとする善功摂化章已下も、この還相の菩薩の第五回向門の真相を語るものである。我等は、はるかにこの還相菩薩の普賢の徳を憶念して、往相の生活をして淳一相続せしめんとするのである。

「善功摂化」とは、先ず、自利を全うするの利他の謂である。けだし、この「自利と利他」とは一体の心の両面にして、自利あれば必ず利他あり、利他あれば必ず自利あり、時に自利のみを言うとも、自利利他の自利であり、時に利他のみを論ずるも、自利利他の利他である。自利利他、二利の中間に如何なる力を以てこれを割かんとするも、ついに自利と利他とを分割することは不可能である。あたかも、自損損他、自害害彼が、ついに無明煩惱の両面に過ぎざるが如きと同一である。

重ねて言う、自利利他は一如不二、一体にして分かたべからず、しかも同ずべからず。これ誠に盡未來際を徹しての真理、嚴として動ぜざる法則なりとす。かるが故に、久遠の本仏已に、自ら法蔵因位に下り、無量寿、無量光の報身を自利満足し、その自利成就によつて、一切群生を利他成就せんとしたまう。若不生者の利他成就なくして、自利正覚の成就是なきが故に「設我得仏（自利）十方衆生（利他）……若不生者（利他）不取正覚（自利）」と誓いたまう。

本仏既に、自利によつて利他を起し、利他によつて自利を成就したまう。いわんや、法界に仏事を化作し、還相摂化の一大事因縁を展開せんとする菩薩をや。自利成就せずして、利他あるべからず、利他なくして、自利あるべからず。「善功摂化」とは、善巧とは自利を全うするの利他、即ち自利利他の利他を言うのである。摂化とは、一切衆生を教化すること、摂化することである。即ち、言いかえれば、実智（自利の智）に即する権智（方便智）を以て、能く衆生を化するを善功摂化と云うのである。

この善功摂化の言は天親論主の浄土論に於いては、「巧方便回向成就」といわれるものである。同一の世界を巧方便回向と云い、善功摂化と言われるのは、浄土の菩薩は、衆生に方便回向することを以て、善巧に衆生を摂化するが故である。

憶うに、人間衷心の願いは、人を苦しめ、人を泣かして、自ら楽しみ、自ら笑い得ると考えるものは無いのである。しかるに、凡夫は、何時しかに、顛倒の妄念によつて、迷い深きものとなり、自ら貪瞋の波浪に吞まれ、現前の煩惱に動かされて、自損損他の闇路にあるものである。自損して自ら知らず、損他して猶ますます識らず、貪欲もの言いて、他の苦惱を苦惱とせず、他の喜びを喜びとせぬものである。されば、自利を全うするの利他たるこの善巧の二文字は、凡夫の世界より去るものである。かくて凡夫自力の世界は、自ら救わず、他を救わざる世界なるが故に、安住なきものなるのである。

先に論には「巧方便回向」と説かれ、鸞師は、「善功撰化」と言われると言つたが、止観四之一には「方便名善巧」(方便を善巧と名く)と言われる。これによれば、方便と善巧とは同一の意義である。註維摩一には、

「方便大要有三。一善於自行而不取相。二不取証。三善化衆生。具此三已則能成就衆。」(方便に大要三有り。一には自行を善くして相を取らず。二には証を取らず。三には善く衆生を化す。この三を具し已れば則ち衆生を成就す。)

と言われる。

その第一は自利の真実なることを明し、その第二は利他の大悲を明かすものである。即ち菩薩は慈悲なるが故に、涅槃におつて涅槃に住せざるを、証を取らずと言われたのである。第三こそは、自利利他一如の境に於いて、衆生を化する方便を示されたものである。この三種は三即一である。

以上の如く考うる時、善功撰化とは、誠に人と人との正しい生活を示されたるもの²ともとることが出来る。されば仏教に於いては、宗の如何を問わず、「回向の心」を教うるものである。死人あれば仏事を営んで追善供養を成し、これをあの世の人に回向せんとするが如き、(或日の新聞にありし一将校の談。某地に於いて戦の後、支那の苦力、敵の死骸を片づけつつあり、これを日本兵士手伝う。後苦力たち、雪を取り来たつて兵士にすすむるも、言通ぜず、将校これを聞けば、死人を扱い、手に悪気あればこれを洗えと云うにあり。苦力の眼には涙が光っている。兵士たちは、死骸を埋めし土の上に、煙草に火をつけて、一本づつさしている。おそらく、焼香のかわりならんと、これ自然にあらわれたる、人と人との回向の心なり。)人の心には、確かに一切衆生の上に、己が善と信ずるものを回向せんとする心がある。かるが故に、仏教に於いて説かれる処の回向八万四千と言われる。しかるにかかる無数の善巧、方便回向の中、其の最も善巧にして善巧なるは具体的には何であろうか。

浄土論にはこれを

「一切衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜん」と作願す。是れを菩薩の巧方便回向成就と名く。」

と説かれる。還相の菩薩といえども、具体的には撰取衆生同生安樂より外に道はないのである。自ら念仏して浄土に願生し、それを通して、衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜしむることこそ、如実の巧方便回向成就である。このことは後に至つて詳説せられる。

余は「柔軟心」の題下に、善功撰化章、障菩提門章、順菩提門章の三章を講述せんとするものであるが、この善功撰化章は、自利によつて利他を起こすを云い、次の二章は、利他を全うじて自利を成ずることを明かす。随つて章目を立つるに、この章は、所起に約して、利他を以て「善功撰化」と名け、次の二つは、その所成に約して、自利を以て名とするのである。然れども其の実は、彼此互に相即し、共に相具するのである。